

# 『乾田化・葉色維持・雑草対策』の徹底で麦の高位安定生産を！

## ●乾田化

麦は湿害に大変弱い畑作物です。稲の収穫時に田面を荒らさないこと、稲収穫後は早期に弾丸暗きょや排水溝(明きょ)を設置することが排水対策の基本です。排水溝の間隔は4～5mに1本を基準とし、排水性が悪いほ場では溝の間隔を細かくします。乾きにくいほ場では、外周を先に掘り、ある程度乾いてから縦溝を掘ります。必要に応じて旗印やロープを使ってまっすぐ掘り、水口側から水尻側へゆるい傾斜をつけます。溝のつなぎ目は手作業で確実につなぎ、必ず水尻につなぎます。

耕起後に雨が降ると土がなかなか乾かないので、耕起～播種の一連作業は同日で完了することが有効です。

播種時期が早いと過繁茂になり黒節病などが出やすくなります。遅いと生育量が少なく、収量や品質の低下につながるため、適期播種(11月上旬)を実践します。

## ●葉色維持

茎数確保や1～3月の葉色を維持するには十分な施肥量が必要です。近年、基肥一発型肥料(緩効性肥料)の施用が増えてきていますが、播種時のスピードが速いと、駆動輪のスリップ等で肥料や種子が十分に落ちません。作業速度は耕起後のほ場の場合は時速2.0km以下に、耕起+播種を1回で行う場合は時速1.0km以下で行います。なお、播種深は3cm程度とし、深播きを避けま。基肥一発肥料を施用した場合、穂肥を施用する必要はありませんが、葉色が極端に落ちている場合は窒素成分で2kg/10aを限度に施用するなどの対策も必要です。

## ●雑草対策

麦栽培で収量、品質を高位安定するためには、適切な雑草防除が欠かせません。雑草が繁茂すると、肥料分が奪い取られることによる減収や、収穫物への雑草種子の混入による品質低下などを引き起こします。雑草防除の基本は除草剤の使用ですが、雑草の種類を把握して除草剤を選ぶことが必要です。

- ・耕起前に雑草が多く発生していて、耕起で十分に鋤き込めない場合には、非選択性除草剤の使用が有効です。
- ・播種後発生する雑草を防除する場合には、土壌処理剤が有効です。
- ・麦類の生育期間中に発生している雑草を防除する場合には、茎葉処理剤が有効です。

【※除草剤を含め農薬を使用する際には、農薬ラベルの内容を必ず確認していただくとともに、他に飛散しないよう十分注意してください。】

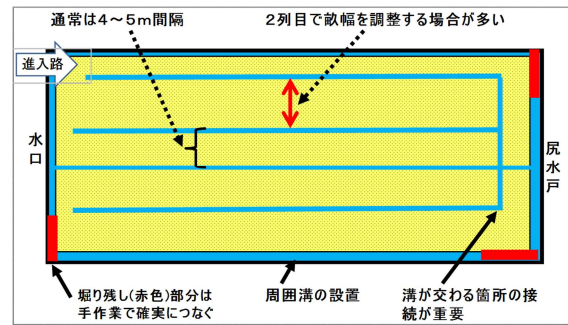


図1 排水溝の施行例



図2 溝のつなぎ目は確実につなぐ



図3 カラスノエンドウが繁茂したほ場